



Title	ゾンゾ攷：文献学的抄物読解
Author(s)	蔦, 清行
Citation	間谷論集. 2020, 14, p. 192-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゾンゾ攷

——文献学的抄物読解——

蔦 清 行

〈キーワード〉 中世（室町時代）の文化と学問 注釈 五山禅僧 臨時的オノマトペ（擬態語）

一、はじめに

——「抄物」とは

本稿は、抄物を文献学的に読解することがどういうことを紹介することを、主な目的とする。

抄物とは、主に室町時代に、五山禅僧や博士家の貴族によって作られた、漢籍や仏典の講義録、あるいは注釈書のことである。我々は抄物を通じて、たとえば漢籍の抄物であれば、当時の漢籍の専門家が、どのような解釈を受講者に伝えていたかを知ることができる。日本文化は、書物を通じて、中国文化から極めて多くの知識・思想・態度を受容してきた。抄物は、日本人がそれらの書物にどのように相対し解釈したのか、その最前線を伝えるという点で、重要な意義を有する文献である。しかもそれは、単純に漢籍の解釈だけを記すのではなく、関連する様々な故事や博物的知識が多

量に記されており、当時の知的基盤を知る上でも貴重な資料なのである。

一―二. 「文献学」とは

では、本稿の副題にもあり、冒頭にも触れた、「文献学」とは何か。これはドイツ語 Philologie の翻訳として案出された用語であり、歴史的にも、また研究者によっても、様々に定義されてきたものである。本稿の筆者は、「その言葉がなぜそこに書かれているのか」を研究する学問と考えている。その文献はどのような時代に、どのような人によって、どのような人（々）に読まれるために作られたのか。文献の中のある言葉を、筆者は何を意図して、あるいは意図せずして、選んだのか。その言葉はその当時の言語体系の中でどのような意味を表すものであったのか。ごく大まかに言えば、これらのことを研究するのが、本稿で言う文献学であると了解していただきたい。

一―三. 本稿の目的

本稿の目的は、その文献学的方法を、いかにして抄物の読解に適用するかを紹介することである。ただし、それだけでは、論文としての学問的価値は十分とは言えない。論文とは、これまでの研究史上未解決の「問い」を提示し、それに答えを与えるものだからである。そこで本稿では、「ゾンゾ」という一つのオノマトペについて、一連の抄物群に現れる用例における意味を考察する。前項に述べた、「その言葉がなぜそこに書かれているのか」を追求するという点から言えば、「ゾンゾ」という言葉がある抄物（群）に記されている、その経緯はどういうことであったか、を明らかにすることである。それを通じて、この語についての従来の説明が妥当であるか、妥当でないとすればどのような訂正すべきであるかを、明らかにしたい。

二、問題の明確化

実際に抄物を読解していく前に、問題をもう少し明確化しておきたい。「ソソソ」について、現時点で唯一の室町時代語専門の辞書、三省堂『時代別国語大辞典室町時代篇』（以下『時代別』と略称）は次のように記述する。

【資料一】『時代別国語大辞典室町時代篇』『ぞんぞ』の項目

1 「ぞぞと」の強調形。「洒洒ソソロサムシ。水ヲカゝルヤウニソソソトスルモノナリ」（病論俗解集）
 2 異様な感じがするほど細かなものが群がっているさま。「茫石湖（二）ガ梅譜ニ直脚梅ト云、ソソソト細フ花ガアリテ、ツヨウ香シイソ」（古文前抄三）

このうち1については、「ぞぞと」の項目では「寒さなどを感じて思わず身ふるいするさま」と記述されており、他の多くの国語・古典語辞典に同様の記述が認められる。しかし2「異様な感じがするほど細かなものが群がっているさま」は、『時代別』の他には類例を見ないものである。【資料二】から【資料四】として、主要な辞典から三つ例を挙げる。

【資料二】小学館『日本国語大辞典』第二版「ぞんぞ」の項目

寒気を感じたり、恐ろしさでふるえあがつたりするさまを表わす語。ぞくぞく。ぞつと。

*病論俗解集〔1639〕「洒々（しやしや）そぞろさむし。水をかかるやうにぞんぞとするものなり」

*俳諧・大坂独吟集〔1675〕上「ときはの里にばけもののさた後からぞんぞとしたる松の風（幾音）」

*浄瑠璃・源氏冷泉節〔1710頃〕上「おづつうのきみ有て、ぞんぞとさむけなどは参らぬか」

* 淨世草子・世間子息氣質 (715) 四二「以前の事を思ひ出せば、天柱 (ちりけ) もとがぞんぞとする」

【資料三】角川書店『古語大辞典』「ぞんぞ (と)」の項目

寒けを感じてふるえるようなさま。ぞつと。

「水をかかるやうにぞんぞとするものなり」〔病論俗解集〕

「寒ふぞんそにあつる袖の風」〔西鶴飛梅千句・九〕

「ただせきのぼせば寒うなつてせなからぞんぞとする」〔けいせい嵐山・序中入之巻〕

「御祝言の水あびせんといふを引取、水あびいでさへ皆様がこわふて、ぞんぞするにと口上よし」〔役者色茶湯・江戸〕

【資料四】小学館『古語大辞典』「ぞんぞ」の項目

寒けだつさま。また、おじけづくさま。ぞくぞく。ぞつと。

「ときはの里に化け者の沙汰後ろからぞんぞとしたる松の風」〔大坂独吟集〕

「御頭痛の気味あつて、ぞんぞと寒けなどは参らぬか」〔浄・源氏冷泉節・上〕

本稿の目的は、より明確に言えば、この記述の差の妥当性を検証するところにある。『時代別』は、さすがに時代ごとの専門的な辞書であつて、他の辞書が見落としている意義をすくい上げていて、ということなのだろうか。それとも、これは『時代別』の言わば勇み足であつて、【資料二―四】の辞書のような記述にとどめておく方が穏当なのだろうか。

本稿は、『時代別』に引かれた「ゾンゾ」の用例を載せる抄物『古文前抄』(正しくは『古文真宝前集抄』)を文献学

的に読解すること、特にその抄文が、他の抄物・中国文献をどのように参照し、それらとどのように関係して記述されているのかを辿ることを通じて、この疑問の答えを探っていくものである⁽²²⁾。

三、抄物の読解

三―一、『古文真宝前集抄』

辞書の記述が妥当であるかを考えるには、まずは用例を検討しなくてはならない。『時代別』の挙げる用例はごく短い一節であるので、用例の採取された資料そのものに当たって、もう少し長く、前後の文脈が分かるように引用する。

【資料五】『古文真宝前集抄』「贈東坡」⁽²³⁾ 黄山谷⁽²⁴⁾

江梅有佳實 託根桃李場。(江梅に佳實有り、根を桃李の場に記す。)

江梅：此詩ハ比之詩ゾ。比ト云ハ、物ニナソラヘテ人ヲホムルゾ。直ニホムルハ近^{ヘン}ソ^クニ。サテ物ニ託シテ云ゾ。梅ノ上デハ何トホメタモ大事モナイン。此詩ハ全篇以^レ梅比^レ坡。コレモ范元實ガ詩話⁽²⁵⁾ニ、坡ガ太夫人、子ヲ折テ梅ト松ト夢ニ見テ、軾轍⁽²⁶⁾ノニ子ヲ生ダゾ。逋齋閑覽⁽²⁷⁾、江梅ハ蜀江ノ梅ゾ。坡ハ蜀人、サテ江梅ト云ゾ。范石湖ガ梅譜ニ、直脚梅ト云、ソソソト細フ花ガアリテ、ツヨウ香シイン。實ガ堅ゾ。又江梅ハ花ヲ云イサウナニ、先ゾ實ヲ云ハ何事ゾト云ニ、古風ノ心ゾ。尚書毛詩ナンドニハ實ヲ云ゾ。花ヲ云ハ、南北朝以來ノ事ゾ。江梅ハヨイ實ガアル花ゾ。(卷三、十四丁表)

抄物は基本的には注釈書的一种であるから、注釈対象となる原典が存在する。この引用で言えば、『古文真宝前集』の卷三、黄山谷「贈東坡」が原典であり、引用一行目の「江梅有佳實 託根桃李場」がここでの説明の対象となる句で

ある。この句は詩全体の冒頭であるので、抄文は詩全体の解説から始まり、その後「江梅」の注釈に及んでいる。簡単に現代語訳すれば、「江梅（ふ）……この詩は「比」の詩である。「比」というのは、ものになぞらえて人をほめるものである。直接ほめるのはへつらうのに近いので、ものに託しているのである。梅をほめたことにすれば、何を言っても大過はない。この詩は全篇、梅を蘇東坡になぞらえている。これも、范元實の詩話に、蘇東坡の母親が、子どもがほしいと祈ったときに梅と松を夢に見て、蘇軾・蘇轍の二子を生んだという話がある。『遯斎閑覧』によると、江梅は蜀江の梅のことで、東坡は蜀の人であるので、江梅にたとえたのだという。江梅は、范石湖の『梅譜』に、「直脚梅といい、ソソノと細かく花があつて、強く香る。実が堅い」とある。また、江梅というと花のことを言いそうなのだが、まず実のことを描写しているのはどうかということかと、古風を意識した表現である。尚書や毛詩などには実のことを言う。花を描くのは南北朝以来のことである。江梅は良い実がある花である」ということになる。

ここから、問題のソソノという語に関しては、黄山谷の詩に登場する「江梅」の語に対して与えられた形容であること、また范石湖の『梅譜』に由来する注文らしいことが判明する。このような場合、文献学的な読解のセオリーとしては、范石湖『梅譜』を参照すべきなのであるが、ここではそれは少し後回しにして、黄山谷の詩の抄物群の記述を先に確認することにした。というのは、范石湖『梅譜』はそれほどメジャーな文献というわけではなく、この注釈の作成者がそもそも参照したかどうか、またしていたとしてどのようなテキストを利用できたのがよく分からないからである。それに対し、黄山谷の抄物は複数の伝本が残されており、その内容を検討することによって、注釈者の五山禅僧たちがどのような中国側の文献を使って抄文を執筆していったのが明らかになってくるのである。

三―二 黄山谷の詩の抄物

さて、黄山谷の抄物の主要伝本系統は、代表的なものとして

萬里集九抄『帳中香』明應八年（一四九九）跋。二〇巻序一卷。国立国会図書館蔵の古活字版・写本が、ともに、国立

国会図書館デジタルコレクションで全部の画像を閲覧できる。

一韓智翹抄『山谷抄』成立年未詳。一韓は生没年未詳だが、桃源瑞仙の東坡詩の講義をまとめている『蕉雨餘滴』ほ

か、永正元年（一五〇四）『湯山聯句鈔』を成しており、本抄もそのころの成立かと推測される。二十巻。建

仁寺兩足院所蔵の六冊本が『續抄物資料集成』に影印されているほか、正保四年（一六四七）版の製版本が高

羽五郎『抄物小系』『丁亥版癸卯本山谷詩集鈔』に謄写版印刷されている。

抄者不明『山谷幻雲抄』永禄二年（一五五九）以前成立（^{二〇}）。抄者は不明だが、柳田征司（^{二〇}）や根ヶ山徹（^{二二}）は

月舟寿桂（一四七〇～一五三三）臨濟宗幻住派。別号幻雲。抄とする。確かに月舟の説を多く含むが、彼自身

の抄という確実な証拠はなく、むしろ大塚光信（^{二二}）の言うように、月舟抄を中心に別人が諸抄を集成したも

のと考えるのが穏当かと思われる。二〇巻序一卷。建仁寺兩足院本は林宗二（二四九八～一五八一。馒头屋、

連歌師、茶人）ほか写。他に、兩足院本の転写本である洞春寺蔵本（巻一、二、五、八、一〇～一二の零本）が

あり、『嘯岳鼎虎禪師自筆本山谷詩抄長州毛利洞春寺蔵』（正宗山洞春寺、二〇〇六年）に影印されている。

林宗二抄『黄氏口義』永禄三年（一五六〇）～永禄十年（一五六七）抄。一韓智翹『山谷詩抄』や『山谷幻雲抄』など

と共通の資料に基づいて編纂した本と考えられる（^{二三}）。二〇巻序一卷。建仁寺兩足院蔵の自筆二十二冊本が唯

一の伝本。未公開。

彭叔守仙抄『山谷詩集註』永正十一年（一五二四）から大永三年（一五二三）にかけて成立（^{二四}）。月舟寿桂の抄を中

心に諸抄を増補し、さらに独自説を加えたものとされる。二〇巻序一卷。市立米沢図書館蔵の自筆十一冊本が

唯一の伝本。市立米沢図書館デジタルライブラリーで全部の画像が閲覧できる。

などが挙げられる（^{二五}）。このうち、彭叔抄を除く四系統は、いずれも『古文真宝前集抄』とおおよそ同内容の抄文を収

載しているので、以下それを紹介していきたい。特に一韓智翹抄『山谷抄』は、細部に到るまで『古文真宝前集抄』に極めて類似する内容を持つ^(二六)ので、最初にそれを引用する。

【資料六】一韓智翹抄『山谷抄』

江梅…此詩ハ、比之詩ゾ。比ハ、物ニナゾラヘテ、人ヲホムルゾ。直ニホムルハ、近^レ諷^ニ。サテ物ニ託シテ云ゾ。梅之上デハ、何トホメタモ大事モナイゾ。此詩ハ、全篇以梅比坡ゾ。是モユワレガ有ゾ。范元実ガ詩話ニ、坡ガ太夫人、子ヲ析テ梅ト松トヲ夢ニ見テ、軾轍ノ二子ヲ生ダゾ。遯齋閑覽ニ、梅仏子松仏子ノ事アリト云々。此書ハ未見ゾ。日本ハ未渡ゾ。江梅ハ二義ゾ。蜀江ノ梅ゾ。坡ハ蜀人ゾ。サテ江梅ト云ゾ。又范石湖ガ梅譜ニ、江梅ト云ガ一種ノ類アルゾ。直脚梅ト云、ゾンゾト細ウ花ガアリテ、ツエウ番シイゾ。實ガ堅ゾ。江梅ハ花ヲ云イサウナニ、先ヅ実ヲ云ハ、何事ゾト云ニ、古風ノ心ゾ。尚書毛詩ナンドニハ実ヲ云ゾ。花ヲ云ハ、南北朝以來ノ事ゾ。江梅ハ好イ実ガアル花ゾ。(卷一、十二丁裏) ^(二七)

先に【資料五】として挙げた『古文真宝前集抄』との一致の度合いは極めて高く、破線を施した部分を除いては、相当細部の言葉遣いに到るまで、ほぼ同文と言つてよい水準にある。『古文真宝前集抄』が本抄を参照したと推定する所である。

その次に確認しておくべきは、林宗二抄『黄氏口義』である。これは林宗二が『幻雲抄』・一韓抄『山谷抄』などの系統の抄物を集成・編纂した抄と考えられるが、そこでも「ゾンゾ」の語を含む同内容の注釈が記述されている。

【資料七】林宗二抄『黄氏口義』

江梅…江梅ハ、自然生、一名直脚梅、野梅トモ云タ。枝モスグナゾ。花小而香多ゾ。瑞岩^(二八)・瑞溪^(二九)ノ義ニ、

一種ノ梅ノ名ト見ゾ。范石湖ガ梅ノ譜ニ、江梅ト云ガ一種アルゾ。直脚梅トモ云ゾ。ソソノト細フ花ガアリテ、ツエウ香ゾ。実ガカタイゾ。比東坡ホドニ、蜀人ナレバ夷中梅ト云心マデソ。此二首ハ六借ゾ。上ハ別ノ事ヲ云テ、底ハ含意ゾ。句面ノ心ハ梅ニ、好実ガアル、実ガアルト云ハ、梅ノ木ノ事マデソ。(卷二、七丁裏)

《現代語訳》江梅は、自然に生えてくるもので、一名を直脚梅といい、野梅とも言う。(脚だけでなく)枝もまっすぐである。花は小さく、香りが強い。瑞岩・瑞溪の解釈には、梅の一種の名だとある。范石湖の梅の譜に、江梅というのが一種記されている。直脚梅ともいう。ソソノと細かく花があつて、強く香る。実が固い。東坡をたとえたので、(東坡は)蜀の人だから、田舎の梅というほどの意味である。この二首は難しい。文字の上では別の事を言つて、裏に隠された意味がある。表面上の意味は、梅に良い実があるということで、実があるというのは、梅の木のことだけを言っているのである。

これもちかなり細かい字句まで一致しており、本抄は一韓抄『山谷抄』との共通抄文を極めて多量に含むことから、こちも一韓抄系統の抄物を利用していると考えるのが妥当である。ただしこちで注意しておくべきなのは、野梅という別名を紹介していたり、「瑞岩」「瑞溪」の解釈を紹介していたり、また「夷中梅」という言葉が登場してきたりと、前後の文脈は必ずしも【資料六】の一韓抄に一致していないことである。つまり、『黄氏口義』は、『古文真宝前集抄』とは異なり、必ずしも一韓抄全体を丸写ししているわけではない。にもかかわらず、こちでも「ソソノ」という語形に揺れはなく、また范石湖の『梅譜』を紹介する文脈も共通する。従つてこの「ソソノ」は、范石湖『梅譜』の内容あるいは文言と深い関係にあることが一層確実になるのである。

その范石湖『梅譜』の本文は、【資料六】一韓抄『山谷抄』にも【資料七】『黄氏口義』にも引用されていないが、『帳中香』『山谷幻雲抄』はそれぞれ個別に引用して紹介している。時代的に先行する『帳中香』から見ている。

【資料八】萬里集九抄『帳中香』

范至能梅譜云、江梅遺核。野生不經栽接者。又名直脚梅。凡山間水濱荒寒迥絕之處、皆生此木也。花稍小而瘦。有香最清。実小而硬。〔注〕見類聚梅部。(卷一、二十二下表)

《現代語訳》范至能『梅譜』によれば、江梅は種を残す。野生で、人の手で切り接ぎしていないものである。又の名は直脚梅という。およそ山間や水辺、荒れて寒々としたところ、人里遠く離れたところに生えるのは、みなこの木である。花はやや小さく、ほっそりしている。最も清らかなよい香りがある。実は小さくて硬い、という。(注)『類聚』梅部に見える。

傍線を施した「花稍小而瘦。有香最清。実小而硬。」が重要である。【資料六】一韓抄『山谷抄』・【資料七】『黄氏口義』では、ゾンゾと細かい花があること、強く香ること、実が固いこと、この三つの要素が、この順序で記されていた。そしてそれは、細かい花があることは「花稍小而瘦」に、強く香ることは「有香最清」に、実が固いことは「実小而硬」に、それぞれその順序までが異なることなく対応するのである。偶然こうなることは考えにくく、両抄のこの部分の抄文は、『梅譜』の、ほぼそのままの翻訳と考えるのが妥当であろう。

さて引用した【資料八】『帳中香』には最後に「注」として「見類聚梅部」とあるが、これは当時盛んに用いられた類書の一つ、『古今事文類聚』^(二〇) 梅部に『梅譜』が収録されているという意味である。【資料九】として次に引用する。基本的に【資料八】の『帳中香』と同文であるが、異同部分については『帳中香』の本文を傍記しておく^(二一)。

【資料九】『古今事文類聚』

梅譜「并序」范至能

江梅遺核。野生不^レ経^二裁^一接^ラ者。又名^ク直脚梅^ト。凡山間水濱荒寒迥絶處、皆此本^{生此本ナリ}也。花稍^小而疎瘦^瘦。有韻香最清。実水^テ而硬^シ。(後集卷二十八、二丁表)

【資料八】『帳中香』と【資料九】『古今事文類聚』との異同のうち、特に「疎瘦」の語には注目したい。この部分が、今取り上げている「ソソソ」と対応する重要な部分だからである。『帳中香』の「瘦」と『古今事文類聚』の「疎瘦」と、どちらが拠るべき本文であるかが問題となるが、その手がかりとして【資料十】『山谷幻雲抄』を挙げておきたい。

【資料十】抄者不明『山谷幻雲抄』

祖溪^{（二）}義『百川学海』^{（三）}甲集下三、范石湖梅譜云、江梅遺核。野生不経裁接者。又名直脚梅。或謂之野梅。凡山間水濱荒寒清絶之趣、皆此本也。花稍小而疎瘦。有韻香最清。実小而硬。(卷一、五丁裏)

『帳中香』とも、『古今事文類聚』とも、僅かず異なる本文である。ただ、今注目している花の小ささについての記述について見れば、『帳中香』「瘦」ではなく『古今事文類聚』「疎瘦」に一致しており、こちらが取るべき本文かと思われるのである。

『幻雲抄』は『古今事文類聚』ではなく、叢書『百川学海』をその出典として挙げている（故に『古今事文類聚』を出典として注記する『帳中香』とは注の系統が異なる）のであるが、その『百川学海』（資料十一）^{（二五）}も、本文を確認すると「疎瘦」としており、こちらの方が一般的に流通した本文であったと推定できる。『帳中香』の「瘦」は、誤って「疎」一字を脱したものと思われる。

【資料十一】『百川学海』所収『梅譜^并序』

江梅遺核。野生不經裁接者。又名直脚梅。或謂之野梅。凡山間水濱荒寒清絶之趣、皆此本也。花稍小而疎瘦。有韻香最清。実小而硬。(甲集第三冊)

以上の検討を踏まえて考えれば、『時代別』所引の『古文真宝前集抄』の用例「ソソント細ウ花ガアリテ、ツエウ香シゾ。實ガ堅ゾ」は、「花稍小而疎瘦。有韻香最清。実小而硬。(花稍小さくして疎瘦。韻香有り、最も清し。実小さくして硬し)」の、ほぼそのままの翻訳と見るのが妥当であろう。そして本稿で問題とする「ソソソ」は、漢語「疎瘦」に対応し、その発音「ソ・ソウ」を利用したオノマトペと推定されるのである。

『帳中香』・『幻雲抄』には、抄文中に「疎瘦」の語だけが現れて「ソソソ」の語は認められず、『古文真宝前集抄』・『韓抄』・『山谷抄』・『黄氏口義』は逆に「疎瘦」がなく「ソソソ」だけが使われている。したがって「ソソソ」と「疎瘦」とのこの対応関係は、いずれの抄物であっても、それを単体で見ている限りは見えてこない。しかし本稿でここまで見てきた僅かな部分からも明らかのように、抄物の文章は、先行する抄物群と密接な関係を持って記されている。したがって、『古文真宝抄』や『韓抄』・『山谷抄』・『黄氏口義』で范石湖『梅譜』に基づくとされた抄文の内容も、引用こそ飲くものの、『帳中香』・『幻雲抄』に引かれるような原典についての正しい知識を背景とすると見て誤らないであろう。つまり抄文の「ソソソ」は、あくまでも漢語「疎瘦」とのつながりを踏まえて選ばれ、そこに記されている語と考えられるのである。

三―三 同時代の辞書などの「疎瘦」

もつとも、実は「疎瘦」という語も、日本語の文献の中ではほとんど用例のない語である。したがって、注釈者たちが「疎瘦」をどのような意味で解釈していたかは、実ははっきり分からない。『時代別』の説明のように、「異様な感じ

がするほど細かなものが群がっている」と解した可能性も、一概に否定することはできないのである。しかし、当時の漢字辞典を見て、「疎」と「瘦」と、それぞれの漢字の意味を単独で考える限り、その蓋然性は低かったように思われる。

【資料十二】『大廣益会玉篇』

疎^{シロ}（^{シロ}）「色魚切。慢也。不密」(卷七、三丁表)

瘦^{シロ}「所又切。損也。説文體也」(卷十一、六丁裏)

『大廣益会玉篇』は当時の漢字辞典（漢字の発音や意味を説明する辞典）として広く流布したものであるが、そこでは「疎」については「不密」、「瘦」については「損」という語釈がなされている。そこからすれば、本稿で問題にしている『時代別』の「細かなものが群がっている」という記述は妥当とは言いがたく、むしろ逆に、まばらにぼつぽつと花がついていると解する方が近いように思う。これは当時の漢和辞典（漢字の和訓を示すことを主な目的とする辞典）『倭玉篇』の和訓を見ても同様である。

【資料十三】『倭玉篇』

疎^{シロ}「ウツヲウトンスヲロソカ」(卷上、五十一丁表)

瘦^{シロ}「ヤスルツカル」(卷中、六丁表)

「疎」に関して「ヲロソカ」、「瘦」に関して「ヤスル」「ツカル」などとあるところからすれば、やはり小さな花がまばらに咲くと理解するのが穏当なのではないかと思われる。

さらに傍証を挙げるならば、「疎瘦」は現代の一般的な辞書には載らない語だが、園藝の世界では梅について次のように使われるという。

【資料十四】鑑賞マニユアル『美の壺』file203「梅」(七七)

園芸研究家の上田良就さん。

上田「太い枝がまばらにある。肌がごつごつしている。幹や枝が斜めになっている。そういう老木の姿は古来『疎瘦横斜(そそうおうしゃ)』という言葉で表わされ、尊ばれてきた。長寿への憧れを梅に託しているということじゃないですかね」

ここで「古来」というのが抄物の作られた時代まで遡るかどうかは分からないが、たとえば天保三〜七年(一八三二〜三六)刊の『江戸繁昌記』にも「疎瘦」の語の例が見られ、やはり梅についての記述である。

【資料十五】寺門静軒『江戸繁昌記』四篇二十九丁裏「新梅園」

臥龍横^テ地ニ鴛鴦「多葉紅梅」翔^ル空ニ。疎瘦老怪何ノ所^ア不^レ有^ニ。

《現代語訳》臥龍(梅の品種)は地に横たわるように生え、鴛鴦(多葉紅梅の梅の品種)は空に翔るように生えている。疎瘦・老怪でないところはどこにもない。

したがって「疎瘦」は、少なくとも梅について言えば、「細かなものが群がっている」ではなく、「まばら・ごつごつ」というような意味で使われ続けている語であると推測される。そうすると『古文真宝前集抄』や黄山谷詩の抄物群における「疎瘦」も、さらにまたその翻訳に当たる「ソニン」も、同様に「まばら」というような意味に理解しておく

のが、注釈者たちの意図に沿うのではないかと思われる。

四 おわりに

四―一 結論

本稿の目的は、第二節において明確化したように、「ソソソ」についての『時代別』の「異様な感じがするほど細かなものが群がっているさま」という意味記述が妥当であるか否かを明らかにすることであった。ここまでの考察からその疑問に答えるならば、少なくとも『時代別』の挙げる用例の解釈としては妥当ではなく、「ソソソ」は「疎瘦」の翻訳と見、「まばら」というほどに解釈しておくべきである^{二八}、ということになる。

ただ、では例えば「ソソソ」に「まばら」という意味があると辞書に登録すべきであるか、と問われれば、本稿の筆者としては、それもまた穩当ではないと答えるだろう。というのは、本稿で扱ってきた「ソソソ」というオノマトペは、原文の「疎瘦(ソソウ)」との音韻上の類似に基づいて用いられた、臨時的なものと考えられるからである。もちろんそれが複数の抄物で揺れることなく利用されていることからすれば、その「ソソソ」の語感^{二九}は、この抄物の注釈者や読者、あるいは当時の日本語話者にとって、ある種の共感を持って受け入れられるものではあったのだろう。しかしそれはあくまで一回的なものであって、ソソソの意味は、基本的には、多くの辞書の記載するとおり、「寒さなどを感じて身震いする様子」と理解しておくのが穩当なのではないかと思われるのである。

四―二 本稿の意義

結論は以上であるが、ここで取り上げた問題の解決はあくまで便宜的な目的であって、本稿のそもそもの目的は、抄物を文献学的に読解するとはどういうことなのかを紹介することにあつた。本稿の扱った範囲では、その要点は大きく

三つにまとめることができる (二九七)。

- 1 一つの原因に対する抄物でも、種々のものがあることを理解すること。
 - 2 ある抄物の言語を、原典や中国側の注釈書の内容と関連づけて考えること。
 - 3 ある抄物の言語を、先行する抄物の影響と関連づけて考えること。
- これらは、さらに一言でまとめるならば、「その文献の成立の経緯を考える」ということであり、「その言葉がなぜここに書かれているのか」を明らかにするという文献学的目標を、抄物の場合に即してやや細かく言い換えたに過ぎない。ただ本稿の筆者は、この方法こそが、過去の人々がいかに思考し、いかに表現したのか、という大きな課題に近く、最も有力な道であると考えられるものである。本稿を通じて、その方法の有効性の一端を実感されたり、あるいは抄物に興味を抱いたりする読者が一人でも現れることを願いつつ、擲筆する。

注

(一) 范石湖は范石湖の誤り。宋、吳郡の人。姓は范、名は成大、字は至能。石湖は号。文名があり、特に詩に巧みであった。『宋史』三百八十六卷(列伝百四十五)に伝がある。

(二) 他人の説の妥当性を確認するような研究目的は、高級なものとは言えない。本稿は文献学的方法の紹介が主な目的であるので、通常の論文の形式に合わせるために、あくまで便宜的に、このような問題設定とした。

(三) ※参考 黄山谷「贈東坡」(黃庭堅(山谷)の詩集ではふつう「古詩二首上蘇子瞻其一」として収録)の翻刻・書き下し・解釈

江梅有佳實、託根桃李場。(江梅、佳實有り 根を託す、桃李の場。)

桃李終不言、朝露借恩光。(桃李、終に言はず 朝露、恩光を借す。)

孤芳忌皎潔、冰雪空自香。(孤芳、皎潔を忌まる 冰雪、空しく自ずから香し。)

古來和鼎實此物升廟廊。(古來、鼎實に和し 此の物、廟廊に升る。)

歲月坐成晚煙雨青已黃。(歲月、坐ろに晩るることを成す 煙雨、青、已に黄なり。)

得升桃李盤以遠初見嘗。(桃李の盤に升ることを得 遠きを以て初めて嘗めらる。)

終然不可口擲置官道傍。(終然として口に可ならず 官道の傍に擲置せらる。)

但使本根在棄捐果何傷。(但本根をして在らしめば、棄捐せらるるとも果して何ぞ傷まん。)

『漢詩大系』(倉田淳之介)の注釈)江辺の梅は良い実になるが、その梅が桃や李の園に植えられた。桃李は梅と仲よくはないが、天の恵みの露は注がれる。梅の白い美しさがそねまれて、清らかな花は空しく香を放っている。昔から鼎のあつもの味を調えるものとして、この梅の実が宮中に入る。いつの間にか時が経って、梅雨に青い実は黄色に熟する。桃季と共に器に盛られることが出来て、遠方の珍しいものとして味われたが、結局は口に合わないとして遠い国道の傍らに棄てられた。しかし根本さえしつかりしておれば、棄てられても少しも悲しむことはない。

『中國詩人撰集』(荒井健)の注釈)南方・揚子江のほとりの梅に立派な実ができて、北方の桃やスモモの果樹園に植樹された。桃やスモモは終始おし黙っていたが、かの樹には朝露が恵み深い日光を借りて輝いた。ひとり咲く花はそのまばゆいばかりの潔白さを嫌われて、氷か雪ほどの白さがただひたすら香るばかり。古來か、なえのなかのこちそうに味つけするために、この梅は表座敷にも出されて来た。年はいつのまにか深まつて行った。ぬか雨のなか、その実の青さは黄に色づいた。桃やスモモを盛った皿の中に入れられることができて、遠来のゆえにちよいとつまんでもらえたが、が、終にお口に合わず、大道のかたわらに捨て置かれた。ただもとの根が健在でありさえすれば、遺棄されたとして果して何を傷心することがあろう。

(四) 宋代の著名な文人、黃庭堅。一〇四五—一一〇五。姓は黄、名は庭堅、字は魯直。山谷道人と号した。

(五) 宋、范温(???)編『潜溪詩眼』のこと。元實は字。荒井健『滄浪詩話』と『潜溪詩眼』——宋代詩學おぼえがき——『東方學報』第四四号、一九七三年)を参照。

(六) 「賦」は蘇軾(一〇三七—一一〇一。姓は蘇、名は軾、字は子瞻。日本では号を用いて蘇東坡と呼ばれることが多い)、「轍」

はその弟蘇轍（一〇三九―一一二二。字は子由。父蘇洵、兄蘇軾とともに、唐宋八大家に数えられる）を指す。

(七) 隨筆。宋・范正敏（?―?）著。

(八) 「江梅…」は、以下の注釈が、原文「江梅」以下の部分に対するものであることを示す記号である。

(九) 拙稿「両足院所蔵『黃氏口義』の構成と成立について」（『訓点語と訓点資料』第一三五輯、二〇一五年）。

(一〇) 柳田征司「抄物目録稿原典漢籍集類の部」（『訓点語と訓点資料』第一一三輯、二〇〇四年）三二頁。

(一一) 根ヶ山徹「月舟壽桂講『山谷幻雲抄』考」（『東方学』一一五号、二〇〇八年）二頁。

(一二) 大塚光信「山谷抄」（『續抄物資料集成第十卷解説・索引』清文堂出版、一九九二年）。

(一三) 注九の拙稿を参照。

(一四) 根ヶ山注一一論文、一一頁を参照。

(一五) 山谷の詩の抄の諸本について、さらに詳しくは柳田注一〇論文・大塚注一二論文を参照されたい。

(一六) 『古文真宝前集抄』はこの一韓智翹抄『山谷抄』を利用して編纂されたのではないかと推定される。

(一七) 本抄のこの部分は基本的に【資料五】の『古文真宝前集抄』と同一内容であるので、現代語訳は省略する。

(一八) 瑞巖竜惺。一三八四―一四六〇。

(一九) 室町時代中期の五山を代表する禅僧、瑞溪周鳳。一三九二―一四七三。臨済宗夢窓派。臥雲山人・刻楮子などと号した。

(二〇) 中国の類書。宋祝穆編。前集六〇巻、後集五〇巻、統集二八巻、別集三二巻。南宋の淳祐六年（一二四六）成立。五山禅僧が愛用していたほか、三条西実隆が購入したことが『実隆公記』永正八年八月十日および十月二十一日条に見える。芳賀幸四郎『東山文化の研究』（河出書房、一九四五年）八二頁および三四七頁を参照。

(二一) 語句の違いはあるものの、解釈上有意な差とまでは言えないものであるので、現代語訳は省略する。

(二二) これも、【資料八】『帳中香』・【資料九】『古今事文類聚』と基本的に同文であるので、現代語訳は省略する。

(二三) 祖溪德潏（?―?）。

(二四) 叢書。左圭編。百七十七卷。南宋の咸淳九年(一二七三)成立。中国最初の叢書とされる。日本では、永享初に一部がもたらされたらしい(『臥雲日件録』宝徳元年九月十八日条)。この書が五山禅僧の間で重んじられたことは、『蔭涼軒日録』・『蕉窓夜話』・『梅花無尽蔵』・桃源瑞仙『史記抄』などに徴して明らかであるという(芳賀注二〇書、六八四頁)。

(二五) 【資料八】『帳中香』・【資料九】『古今事文類聚』・【資料十】『山谷幻雲抄』と基本的に同文。現代語訳は省略する。

(二六) 「疎」は「疎」の異体字。

(二七) 『鑑賞マニユアル美の薈』は、「暮らしの中に隠れたさまざまな美を紹介する」(番組ホームページより)NHKの教養番組。file203(第203回)は、梅の美を紹介する回であった。引用は番組ホームページ(<https://www.nhk.or.jp/subo/program/file203.html>)より。二〇一九年十二月二十五日最終閲覧。

(二八) これは『時代別』の価値を大きく損なうものではない。辞書の用例は常にこのような可能性を含むものであり、むしろ使う側のリテラシーの問題と理解したい。

(二九) この三項目は『国語学大辞典』「抄物」の項目(柳田征司執筆)で注意された諸点を、本稿の立場からまとめ直したものである。

使用文献

読解の便を考慮し、適宜濁点・句読点を加えた。割注・小書きは「」で括弧して示した。書き下し文は私に作成した。『古文真宝前集抄』：寛永十九年整版(東京大学文学部国語研究室蔵。請求記号IB14.L28969)。『黄氏口義』：建仁寺両足院蔵本。『山谷幻雲抄』：『嘯岳鼎虎禅師自筆本 山谷詩抄 長州毛利洞春寺蔵』(正宗山洞春寺、二〇〇六年)を底本とし、建仁寺両足院本で校合。『山谷抄』：大塚光信編『續抄物資料集成 第六卷 山谷抄』(清文堂出版、一九八〇年)。『帳中香』：国立国会図書館蔵古活字版(国立国会図書館デジタルコレクションによる。請求記

号 WA7-92)、『古今事文類聚』…国立国会図書館蔵寛文六年刊本(国立国会図書館デジタルコレクションによる。請求記号 032-Sy997k)、『百川学海』…筑波大学附属図書館本(国文学研究資料館 新日本古籍総合データベースによる。請求番号 6-389-10)、『大廣益会玉篇』…早稲田大学図書館蔵慶安四年刊本(早稲田大学古籍総合データベースによる。請求記号 ホ 04 00351)、『倭玉篇』…国立国会図書館蔵慶長十八年古活字版(国立国会図書館デジタルコレクションによる。請求記号 WA7-79)、『江戸繁昌記』…国立国会図書館蔵天保刊本(国立国会図書館デジタルコレクションによる。請求記号 840-13)

附記

貴重な資料の閲覧をご許可いただいたご所蔵者・機関に感謝申し上げます。

本稿は第三二回日本語日本文化教育研究会(二〇一八年六月三十日)における口頭発表に基づくものである。

本研究は JSPS 科研費 JP19K00356, JP18H00643 の助成を受けたものである。

ツタ キヨユキ(大阪大学日本語日本文化教育センター)

A Study on ZONZO

Reading Shōmonos through the method of philology

TSUTA Kiyoyuki

The purpose of this paper is to clarify the meaning of the word "zonzo" that appears in a shōmono (commentaries written in kana on Chinese classic books) of "Guwen zhenbao".

In some dictionaries, there are some descriptions such as "appearance that shows a small collection of things" for this word. However, when looking at the shōmonos of Huang Tingjian, one of which was the basis of the shōmono of "Guwen zhenbao", and pursuing the process by which this word was chosen, the meaning of this word can be got clarified. ZONZO in the said sentence is a translation of a Chinese word "shū-shòu", meaning "sparsely blooming", and should be considered to be an extraordinary onomatopoeia which is derived from the form of the Chinese word.

This paper is also an introduction to the method of philology, especially how to read the shōmonos to study the authors' intensions.